

架橋に夢を架けた 親子二代五〇年



架橋に夢を架けた

親子二代五〇年

目次

城戸常美

天の時、人の出逢いは地域の運命をかえる

1

だれもが正気のサタと思わなかった架橋構想

5

ヨゴレがふたり、大蔵大臣につめよった

9

コップのむこうに橋がみえた

13

夢完成、町長落選、しょんぼり歩く橋のうえ

18

生涯の生活信条『はんねんち攀念智をもたない』

24

約束したことは絶対にやる！理屈と膏藥はどこにでもつく

25

城戸常太

プロローグ

政治家はまず志をもて

中国・四国の中心的役割を果たす地域

第二音戸大橋開通

構想のはじまり

困難・打開

呉市中心部を取り囲む主要自動車道の現状

広島・呉・東広島環状自動車道構想

構想がもたらす恩恵

広島大貿易港

夢の道

企画・構成・編集 井上隆
構成協力 國井隆史

28 29 30 31 32 33 35 36 38 41 42 史武

城戸常美



天の時、人の出逢いは 地域の運命をかえる

万葉の昔、長門の島と詠まれた広島県安芸郡倉橋島に、釣士田という泊りがある。

この町に生まれたひとりの男の戦後史は瀬戸内海の島々の歴史であるといつてよい。倉橋島は音戸の瀬戸をへだてること150メートル、呉市の対岸に位置する。この瀬戸は遠く平安の昔、平清盛によつて開かれたと伝説にある。

その伝説が事実とすれば、倉橋島は清盛によつて「島」となったわけである。

話は昭和12年にさかのぼる。日本大学工学部、土木工学課に学んだ青年こそ、24年後の昭和36



昭和30年代の釣士田港

年12月、日本道路公団によるわが国初の海を渡る橋、音戸大橋の仕掛人、城戸常美であった。

城戸常美は大正2年6月23日 父常治、母キヌヨの長男として、倉橋町釣士田に生まれた。存命ならば今年100歳になる。祖父常



母 キヌヨと常美

太郎は、安芸郡の郡議会議員、父常治は倉橋島村の村長を勤めた。城戸家は代々地域と政治に関わりの深い家系であり、物事を目先ではなく、大局的な見地から見るといふ家風があった。そのような家庭環境の中、明德尋常小学校、旧制修道中学を経て、日本大学工学部土木工学科に学んだ。

少年時代、島に育った城戸はふるさとの



日本大学時代の常美

島の自然を愛することとは別に、島であるがゆえの不利、不便を誰よりも肌感じていた。

青雲の志に燃える城戸が日本大学工学部に学んだのも、やがて将来の日本をにらんだとき、土木工学こそが日本の未来をつくる基盤のひとつであることに着目したからである。

島に橋を架けること、城戸はすでに昭和12年にその夢を構想として、日本大学工学部の卒業論文に打ち出したわけである。

政治における天の時と人の出会いは、地域の運命を大きく左右する事がある。卒業後8年経て、城戸が終戦の混乱の中でふるさとの将来に思いを



倉橋島の子供たちに話す池田勇人と常美(右端)

巡らせていた頃、もう一人の男もまたこの国の未来を考えていた。後の内閣総理大臣、池田勇人であった。この2人こそが、城戸はふるさとにあつて瀬戸内海の島々を次々と架橋によつて結ぶ原動力となり、池田は都にあつて日本の経済発展の基礎を作る源を生み出したのである。池田の選挙区は広島県2区、安芸郡倉橋島は2区に入る。

物語は昭和30年にジャンプする。



瀬戸の音戸の架橋前

だれもが正気のサタと思わなかった架橋構想

昭和30年、41歳にして倉橋町長となるや彼は、本土と島を結ぶ橋、音戸大橋架橋の実現に向けて驀進した。

時を同じくして、音戸町の町長に、城戸家とはきわめて因縁の深い、平原が就任した。城戸と平原は、池田勇人を応援する仲でもあった。そこで城戸は、平原に架橋構想を打ち明け、ともに実現に向かって運動していくことを確認しあった。

城戸は行動を開始した。まず、対岸の呉市を引き込まなければならぬ。そこでさっそく、当時の呉市長、松本賢一に話を持ちかけた。しかし、松本は社会党であり、架橋について原則的な了解を取り付けはしたものの、中央に対する働きかけ、つまり池田勇人のもとに共には行きにくい状況があった。そこで城戸は、呉市議会の議長であった奥原義人に頼むことにした。しかも奥原は平原の甥でもあった。

昭和30年、音戸大橋架橋実現のための「期成同盟会」が結成された。会長は松本呉市長、城戸と平原は副会長になった。同時に呉選出の県会議員6名を、推進運動のサポート役として配した。

そして、これら一同が、時の広島県知事、大原のところへ陳情に乗り込んだ。

大原は、城戸の若い頃を知っていた。城戸は「音戸に橋を架けて欲しい」と単刀直入に切り込んだ。大原は余りの申し入れに驚いた。そればかりか必要とする予算を聞くや、言



左から池田勇人、城戸常美

下に拒否した。そんなことで引っ込む城戸ではなかった。

「たまげてもろうては困る。音戸・倉橋には4万人からの人間が住んでいるのだ。本土に渡る橋のひとつもあつたていいはずだ」。

これを聞いて大原は怒り出し、

「キミらはものを頼みに来たのか、それともケンカを売りに来たのか」と、一切取りあつてくれなかったのである。そこで今度は、県議会議長のところへも行つたが、彼も取りあげるわけにはいかなかった。城戸の構想そのものを、誰もが正気のサタとは思わなかったのである。

結果的に第一関門突破はならなかった。

「期成同盟会」そのものも有名無実のものになりかけた。「橋を架けよう」という声も次第に勢いをなくしていった。

正直、城戸は困った。町長選挙の公約はもとより、町長になってからも彼は、議会で繰り返し「橋を架ける」ことを言い続けていたからである。城戸は考え抜いた。なにか妙案はないものか。

「道路公団を使って橋が架けれるはずだ！建設費の支払いは通行料でまかなえるのではないか。コレでいこう！」城戸は腹をくくった。そしてこのことを時の蔵相、池田勇人に直接ぶつけることにした。いつきに頂上作戦に出たのである。

しかし、一部島民は、「海に有料の橋を架ける？」という発想そのものを受け入れようとはしなかったのである。「町長は東京へ芸者を買に行きよる」等、非難と中傷の中に、上京の日々は続いた。

ヨゴレ、がふたり、大蔵大臣につめよった

城戸は平原を伴って大臣室に入った。しばらくするとモーニング姿の池田が戻って来た。宴席でもあるのか、余り時間はないようだった。

「城戸、なんしに来たんない」。

池田は例のダミ声でどなるように言った。城戸はすかさず

「道路公団で橋を架けますね」と確認を取り、たたみかけるように

「音戸に橋を架けてもらいたい」と、池田に迫った。

池田は「音戸はダメじゃ」と言下に退けた。

「なんでダメなんですか」城戸はその理由を聞かせると再び迫った。

「高橋に、尾道に橋を架けることを先に約束したんじゃ。1年のうちに海に2つの橋は架けられん！」

しかし、そんな理由を聞かされて「ハイ、そうですか」と諦めるような城戸ではなかった。

城戸はますます勢いづいた。

「架けられんものは架けれん！」池田は二べもなかった。

「なんぼ偉い奴でも、クソを垂れるときゃ尻をまくらにやいけんのじゃ」。

開き直った城戸は、池田を攻めにかかったのである。

「池田さん、尾道や向島でフダもろうて大蔵大臣になられたんですかい。倉橋、音戸、呉などのフダをようけもろうてそこまになっちゃったんでしょうが。音戸に橋を架けてもらえんのなら、ワシはすぐ倉橋へ



池田勇人歓迎会 乾杯音頭 城戸常美

帰って辞表出しますわい。町のみんなに約束したことができんですけえ、責任取らにやいけんでしょう。そのかわり辞表の中に、池田さんに頼んでもダメじゃった。ワシらの言うことを聞いてくれん池田みたいなバカは、次の選挙で落とせいうて、はつきり書かせてもらいます」。

なんと城戸は、池田蔵相を威しにかかったのである。

池田は思わず、

「城戸、おまえは、このワシをゆするんか！」とどなった。

そして、かたわらにいた秘書の登坂重次郎に向かって

「登坂、岸道路公団総裁に電話せえ」。

池田が落ちた。城戸は、密かにほくそえみながらも、池田がどういう電話をするか見守るために、大臣の机の電話ににじり寄っていった。

「岸クン、この間君に、尾道に橋を架けてくれと頼んだが、いまここへ、広島之音戸からヨゴレが2人来て、音戸にも橋を架けてくれんと、次の選挙でワシを落とすいうて威すんじゃ。音戸にも予算をつけてくれ

んか」。

このことは、大蔵省主計局長にも指示され、音戸に橋を架けるための調査費が正式についたのである。

「城戸、あれでエかろうが！」。

池田は手にしていた煙草をにじり消して、憤然として大臣室を出ていった。城戸の頂上作戦は成功した。しかも、調査費をつけることを約束させたばかりか、尾道よりも先に架けることをも納得させた形になったのである。

城戸はこのことを通して、はからずもひとつの政治的な教訓を得た。2つの国家事業が競合したときには、必ず先に取らなければならない。後手に回ったら10年は遅れを取る。

事実、尾道大橋は、音戸大橋の完成から7年を待たねばならなかった。城戸の得た教訓通りであった。

コップのむこうに橋がみえた

しかし、大きな難問があった。一体どういう形の橋を架けるかということである。日本大学土木工学科で橋梁学を専攻し、卒業論文で『鉄筋コンクリートによるローゼ桁橋について』を著した城戸は、音戸大橋の具体的なイメージをすでに持っていた。

もうひとりの推進役である平原は、車をエレベーターで橋の上まで上げて渡すという「ガントリークレーン方式」の橋を考えていたようであるが、城戸に言わせれば、そんなものは橋ではなかった。城戸は自分がイメージしている橋について、ことあるごとに説いて歩くと同時に、自ら何度も現地に立ってプランを検討した。しかし、その城戸にしても、この場所に橋を架けることの困難さを認めないわけにはいかなかった。

当時、音戸の瀬戸を往来する船は1日800隻を数えた。さらに城戸が考えている橋を実現するためには、音戸側の住宅密集地域に立ち退き

を迫らざるを得なかった。それが簡単にできるとは、さすがの城戸にも思えなかった。また、平原をはじめ架橋運動をすすめている連中が、一体どこまで橋の実現可能性を信じているものやら、城戸はその点でも、疑念に近い気持ちを禁じ得なかったのである。

城戸は音戸側の山に幾度かのぼり、ひとり思案を重ねた。地形を見れば見るほど、ひと筋縄ではいかなことが痛いほど分かった。そのとき城戸にひとつのアイデアが浮かんた。両岸に高さ30メートルのビル状の構築物をつくり、それを橋脚にして橋を架ける。構築物までは15分の1の勾配を持つアプローチをつける。アプローチの長さは計算上450メートルになるので、それは沿岸道路に沿う形の海上橋的なものにすればいい……。

しかし問題は、そうすれば音戸町の中心が現在の位置よりずれることになり、到底町民の賛同を得ることはできない。それに何より莫大な費用がかかり、いま考えている予算では実現しない……。

さらに悪いことに、広島県や呉市の土木行政に携わる者たちの間に、純技術的に考えても音戸の瀬戸に橋を架けることは不可能である。ここはなんとか納得して、国に予算を返上して、架橋計画そのものを葬り去ろう、という動きが出はじめ、予算返上を決定する会議が、呉で開かれることにさえなつたのである。

城戸は窮地に追い詰められた。橋を架けることを約束した倉橋の町民にどう申し開きをすればいいのか。恐喝まがいで予算をつけさせた池田勇人に対して、一体どう責任を取ればいいのか。何か手はないものか。町長室で日常の仕事をこなしながらも、城戸の頭の中は、この最大のピンチをどう切り抜けるか、そのことでいっぱいだった。

町長としての城戸は、町民のいろんな宴席にもしばしば顔を出さなければならなかった。それは多いときで1日に5件もあった。城戸はそれぞれの先でコップ酒を2杯ずつ馳走になりながら、「橋をなんとかしなければならぬ」。酔い切れないまま家路を辿る日が続いた。

予算返上の会議を明日に控えたある日の深夜、城戸は酔い醒めの水を飲むために、枕もとのやかんからコップに水を入れて手に持った。コップのガラス越しに自分の手の指が見てとれた。そのとき、城戸の頭の中に何かがひらめいた！

「ほうじゃ！ 橋脚にする構築物を円筒型にして、それに道路を巻きつけばエエじゃないか。そして、この円筒の中に役場と保育所を入れてしまえば、橋が架かっても町の中心を動かすことはない。



グラスを手に、音戸側ループ道路の発想を報道関係者に説明する城戸常美

これなら町民も納得してくれるはずだ」。

コレしかない。城戸はハラを決めた！

翌朝、城戸は所用で県庁に出向いたのであるが、その足で道路課の熊崎係長を自らたずねた。自分が思いついた橋の構想について説明し、それに基づいて図面を描いてくれるよう依頼した。そして急いで呉にとつて帰り、予算返上を決議する会議の場へ飛び込んだのである。ところが、城戸がいない間に決定はすでに下されていた！ 城戸はしかし諦めなかった。

「こうやりゃあ出来るんじゃないか、とにかく返上は待ってくれ」。

決まったということで耳を貸そうともしない面々に自分の構想を話し、ひとまず返上することだけはストップさせた。

夢完成、町長落選、しょんぼり歩く渡りぞめ

その翌日、池田勇人が朝6時30分広島着の特急「あさかぜ」で帰広。平和公園横の新広島ホテルにチェックインした。迎えに出た城戸と平原に、池田はたずねた。

「橋はどうなりよるかいの？」。

城戸はすかさず自分の考えを説明した。

目をつむり黙って聞いていた池田勇人は、膝をはたとたたき、

「そりゃあ面白い。凶面ができたらワシのところへ持って来い」と言っ
た。

あのとさほど、池田という人物の大きさを思い知らされたことはない。
と、いまになって城戸は述懐している。

池田を納得させたあくる日、今度は日本道路公団の副総裁が現地入り
した。城戸は彼を連れて呉側の山へのぼり、架橋方法について詳しく説



開通した音戸大橋

明した。しかし、彼は城戸のいわんと
することをほとんど理解していないよ
うだった。

城戸は副総裁に同道していた設計課
長に、さらに詳しく自分の構想を話す
とともに、彼を伴って音戸の瀬戸を渡
船で音戸側に渡り、実測するなどして
説得につとめた。

設計課長は基本的には城戸の構想に
賛同した。ただし、車が見通しよくス
ムーズに走れるかどうか、その点につ
いて疑問を呈し、自分で実際に図面を
ひいて検討を加えてみることを約束し
たのであった。

いよいよ橋の工事がはじまった。最終的に設計図面をひいたのは、日本道路公団から依頼を受けた日本大学土木工学科・橋梁学の教授、成瀬勝武であった。奇しくも彼は、城戸が日本大学に学んだときの橋梁学の専任教授であった。この成瀬と城戸は、城戸が学生時代にあることで対立した間柄であった。

「音戸というところに珍しい橋ができているそうだ」音戸大橋は建設途上から話題を集めた。日本土木学会の理事クラスの教授連中も視察に来た。彼らの中にも、城戸が学生時代に学んだ教授がいた。東大の最上武雄教授（応用力学）もそのひとりだった。城戸は一同を料亭に招き、そこで改めて音戸大橋の設計図面を指し示し、自らの思うところを存分に披露したのである。

「ワシもたいしたことを考えるでしょうが。こがな橋は日本はおろか世界にもないと思うんじやが、先生方どうですかいの」。

「ワシにも工学博士の資格がありますでしょうが。ひとつワシに博士号

をもらえませんかの」。一同は、城戸の卓拔さを認めざるを得なかった。

日本大学の土木工学科に学び橋梁学を修めた城戸であるが、彼は、土木工学そのものが経験工学であることを知りぬいていた。とりわけ、県や市、つまり地方自治体の役所に勤務する技術者の多くは、過去の事例を何よりの判断基準にして考えるということを見ぬいていた。

橋についていうならば、これまでに作られていない橋や、研究論文や文献に紹介されていない橋などは、彼らにとっては一考に値するものは到底思えなかったのである。その意味からすれば、城戸が考えた音戸大橋の形は、これまでにそんな事例がないだけに、彼らの理解の範囲を超えるものであったであろう。

「出来てみりゃあ、どういふことのない橋じゃが……」と、城戸はサラリというが、彼が橋梁学のいわゆる専門バカでしかなかったら、また経験工学的な立場に固執する地方自治体の技術者を説きふせるだけの情熱を持っていなかったら、音戸大橋は到底完成していなかったであろう。

昭和36年12月3日、音戸大橋は開通した。しかしその時、城戸は、町民のひとりでしかなかった。昭和34年春の町長選で、「有料の橋を架ける」という城戸の発想も災いして苦杯をなめたのである。彼とともに橋の実現に奔走した平原も、音戸町長の席を譲り渡していた。対岸の呉の市長も奥原に変わっていた。

落成式の前日、毎日新聞の記者が城戸を尋ねて来た。城戸は盟友平原とともに手を取り合ってふたりだけの渡り初めをした。そして、城戸は冷や酒の入ったグラスを高々と持ちあげた。どんな橋にすればいいのか、苦悶の日々を送っていたかつて、酔い醒めの水を飲むために手にしたグラスから、音戸大橋の形を決めさせることになったことを、城戸はしみじみと思い起こしていたのである。

落成式の当日、3代続いている島の家族を先頭に、日本道路公団総裁、広島県副知事、池田蔵相代理、呉市長、音戸と倉橋の町長の一同は、海面上23・5メートル、全長172メートルの真紅のアーチを渡ってい

った。この橋の完成に政治生命をかけた城戸、労をともした前音戸町長の平原、前呉市長の松本の3人は、その後から遠慮がちに、城戸の言葉借りれば、しょんぼりしょんぼり渡っていったという。

まるでその様子がみえるようだ。

その橋を眺めながら生前の池田は言ったと言う。あの時は、要求とか説得とかと言う代物ではなかった。まるで、城戸の脅迫であつたと周囲に語った。

生涯の生活信条 『攀念智をもたない』はんねんち

城戸家は代々浄土真宗の門徒である。

仏教・信仰から学んだ。『攀念智をもたない』ことを城戸は生涯の生活信条とした。政治の土俵での信念をめぐる議論は、屈することのなかった城戸であったが、一般社会での人間関係では、攀念智をもたない信念を貫いた。世間では、隣に蔵が建てば腹が立つとか、煙のない所にも煙を立て、悪口・雑言をまきちらす人間が時折いる。『攀念智』とは人を恨む、憎むという想念の意である。人を恨む、憎むという想念は、自分のエネルギーをすべて奪う、つまり攀念智を抱いた人が不幸になるという意味である。この信条は、城戸の生涯の美学でもあった。



生活信条を語る城戸常美

約束したことは絶対にやる！ 理屈と膏藥はどこにでもつく

城戸の生涯で痛恨の極みがあったとすれば、晩年、病魔との戦いの中で妻と死別した事であった。昭和52年、妻ゆりこは、胸の病に伏した。翌53年、母キヌヨが永い眠りについた。その母の四十九日法要の夜、城戸常美が倒れた。脳血栓であった。意識不明は2週間続いた。さらに1ヶ月後、ゆりこの病状は悪化、夫婦共々、広島市民病院のベッドに重病の身を横たえる事になった。その時、ゆりこは手の施しようのない肺がんの末期であった。5期目の県議選は目前に迫っていた。長男常太の極秘の指示は、妹の良香にのみ伝えられた。「母が肺がんである事を決して父に知らせてはならない。それは、父を1日も早く回復させる事が、母にも父にも精神的な励みを生む事になる」。と判断したからである。政治に身を置く者の執念とも言える病床からの立候補は奇跡的な勝利をおさめた。その城戸を蘇らせたとも言える妻ゆりこは、昭和55年、

ふるさとの夏の潮騒にいざなわれる
ように帰らぬ人となった。享年58
歳であった。

城戸は言う。

「地域の人々に、こうしますと約束したことは、それに反対する役人や政治家と断固対決してでも、絶対にやる！ しかも、そのためには手段を選ばん。理屈と膏藥はどこでもつく！」。

昭和62年、再び城戸は病いに倒れた。7期目の県議戦突入の直前であった。

病院のベッドで城戸は苦笑した。



晩年地域の将来を熱く語る城戸常美

「ワシのからだは元気でもう20年若かったら、政治の面でまだまだ先駆けたいことがある。ワシの頭はもう21世紀へ翔んだ。とはいっても人間出所進退が大事よ。」

政治家いうもんは、なんぼ偉いいうても、年を取つとることを忘れとる。ワシの場合も頭は人より進んでおるといふ自負はあるが、体は年を取つてもうた」。

病室に父を見舞った長男常太は「父の跡を継ぎ、政界に出馬したい」と父常美に打ち明けた。

「まず、志を持て、何があるうとそれを継続することじゃ」父は子に教えた。

長男の常太が父の跡を継いだ。

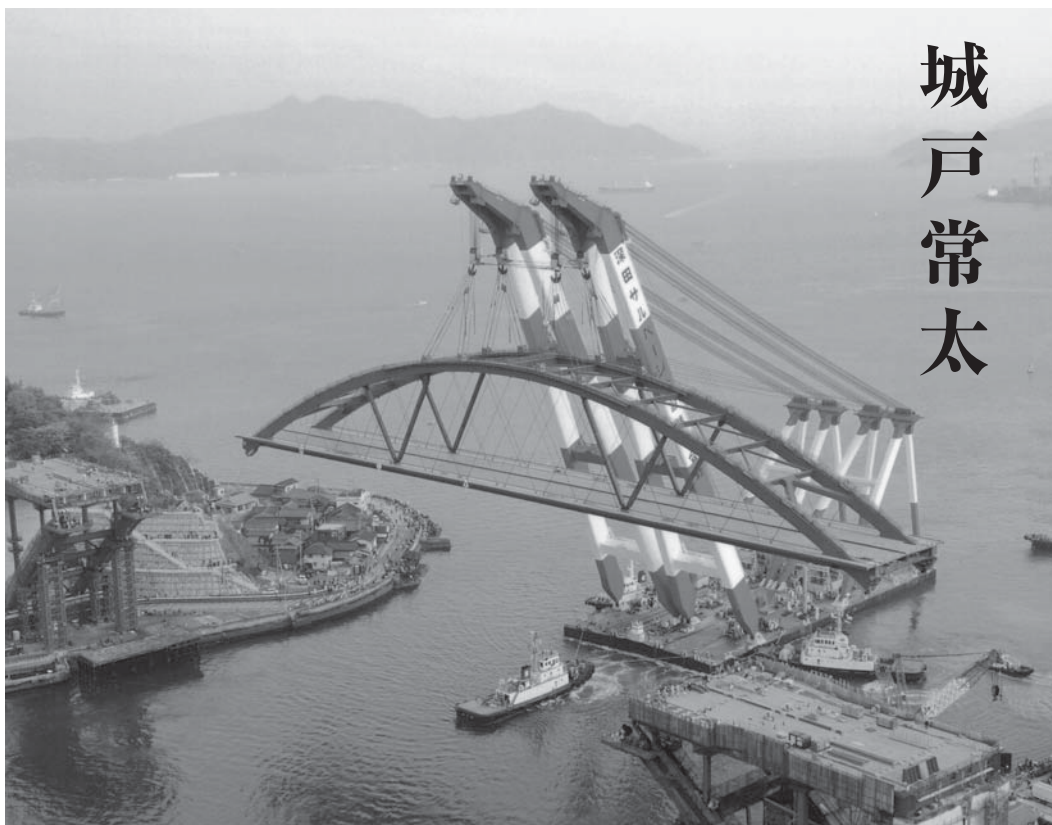
「後生、畏るべし」と『論語』にある。

● 主な参考文献（内容・引用および図版）

『広島の時代』（日本地域社会研究所 夢を架けた男 城戸常美）

『論語』

城戸常太



プロローグ



家族写真 右から 父 常美 長男 常太 母 百合子 長女 良香

「人間は鎖の一環ですね、遙かな過去から未来に伸びてゆく鎖の。——人間のすばらしさは、自分のことを、たかが一環かとは悲観的におもわないことです。ふしぎなものですね。たとえば、小さい人たちはいきいきと伸びてゆこうとしています。少年少女が今の一瞬を経験するとき、過去や現在の誰とも無関係なまっさらの自分だけの心の充実だと思っているのです。荘厳なものですね」。

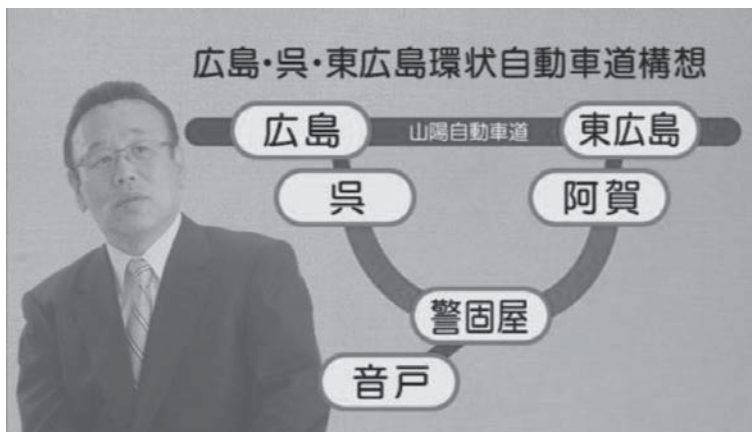
これは司馬遼太郎の著書『21世紀に生きる君たちへ』の中の一文である。

城戸常太は昭和20年、城戸家の長男として倉橋町に生まれた。今年68歳になる。

常太の幼い頃の思い出は、父常美のしつけとして玄関で来客の靴を揃えるという自分の姿であった。1987年昭和62年41歳の春、父常美の跡を継ぎ城戸常太は広島県議会議員に初の議席を得た。

政治家はまず志をもて

父は子に教えた。そこから生まれたのが、呉・倉橋・江田島を発展へと導く「環状自動車道構想」。城戸常太が持った志である。人を運び、物を運び、24時間休むことなく暮らしを支える道路網。しかし、その建設には、20年、30年という時間が必要となる。そんな歳月をゆるぎない志で進んできた城戸常太。まさに今、その構想が、「夢の道」という形で実を結ぼうとしている。



環状自動車道構想

中国・四国の中心的役割を果たす地域

平成の合併により音戸・倉橋・下蒲刈・蒲刈・豊浜・豊・川尻・安浦は新呉市となった。城戸常太はこの地域の将来こそが、中国・四国の中心的役割を果たすと確信している。その為には豊島大橋からの道を、愛媛県、大三島のしまなみ海道に繋ぐ構想の早期実現を訴える。これにより四国路から最短距離で呉、広島を結ぶ東西ルートができることになる。加えて城戸は将来完成予定の東広島呉道路を阿賀からさらに第二音戸大橋まで延伸すべきだと力説する。これが決定すれば、島嶼地域から空港への大幅な時間短縮が可能になる。新呉市が国の政策でもある観光立国日本のおおきな役割を果たすことになるかと確信している。



しまなみ海道から呉・広島への最短コース



完成した第二音戸大橋

第二音戸大橋開通

2013年3月。第二音戸大橋開通。
第二音戸大橋は、従来の音戸大橋と比べ、自動車専用道としても充分役割を果たせる規模で作られた新世代の橋である。完成にともない、警固屋音戸バイパスも開通。音戸大橋の渋滞を解消し、よりスムーズな行き来が可能となった。

構想のはじまり

この第二音戸大橋の構想が誕生したのは、今から26年前。城戸常太が、広島県議会議員一期目の時である。常太の父、常美は、音戸大橋架橋事業を手がけた人物。常太は、父の「道路網の整備が地域活性の鍵」という信念を受け継ぎ、呉と島嶼部、そして広島を結ぶ広大な自動車道構想を打ち出した。



宏池会本部にて父と子

困難・打開

1980年代当時、国道375号を延ばし四国へつなぐ行政構想がすでに存在していた。そのため、常太の構想は、実現するのがかなり難しいとされた。



佐々木 有元 呉市長

この困難を打開できたのは、ある人物への相談が始まりだった。当時の呉市長、佐々木有氏。城戸常太は、自動車道構想の実現



当時の行政構想と城戸構想



故 池田行彦元外務大臣

について、佐々木市長に相談した。佐々木は建設省から、呉市に出向した助役を城戸に紹介した。そこから、県道の国道昇格、第二音戸大橋架橋が実現に向けて走り出したのである。城戸は県・国に対する陳情を繰り返した。国に於いては「故 池田行彦元外務大臣」の力添えを得た。

1992年平成4年、島の県道は国道487号に昇格、2013年平成25年、第二音戸大橋は開通した。



来呉された、天皇・皇后両陛下をご案内する佐々木元市長



連結していない呉市中心部の主要自動車道

呉市中心部を取り囲む 主要自動車道の現状

現在完成または建設が決定している、呉市中心部を取り囲む主要自動車道は、広島市から呉までの広島呉道路、山陽自動車道高屋から阿賀までの東広島呉道路、そして今回開通した、警固屋音戸バイパスがある。これら自動車道の弱点は、いずれも連結されていないことである。

広島・呉・東広島環状自動車道構想

城戸常太の広島・呉・東広島環状自動車道構想は、これらの分立した道路を信号のない自動車専用道で結ぶ構想である。



構想を打ち出す城戸常太



阿賀から延伸、警固屋から高架で広島道路へ連結

①東広島呉道路を延長

阿賀にできる東広島呉道路の出口は、そのまま南下させ、県道65号より1つ山側を走り音戸へ。トンネルをぬけて第二音戸大橋へ連結する。

②広島呉道路へ延長

警固屋音戸バイパスからは、高架を利用し、日新製鋼、IHIの東を経て、堺川沿いに北上。市役所前を通り、広島呉道路の出口に連結する。

こうして、東広島、音戸、呉、広島を1つにつなぐ。



東広島・音戸・呉・広島が連結した時の自動車道

構想がもたらす恩恵

城戸常太の構想は、これらのコースを信号のない自動車専用道で結ぶ、
というもの。それにはどんな恩恵があるのだろうか？

①流通の効率化

まず1つ目は、流通の効率化。

すべての道幅を3.5m以上とり、カーブも大型トラックが通行できるように、ゆるやかにつなぎ、信号のない自動車専用道にすることで、渋滞を防ぎ、時間どおりに人や物を運ぶ。時間というコストを最小限にすることができる。

②バイパス効果

2つ目はバイパス効果。

現在の呉・広間を結ぶコースは、一般道のため信号や交差点による渋滞を避けることができない。バイパスの役割を果たす自動車専用道を建設することで、休山新道の機能をこれまで以上に引き出すことが可能になり、渋滞を和らげることができる。

また、広島・呉道路から自動車専用道を降りずに広までいけることで、呉市街の一般道に入る車の量を減らす事も可能。これは市街地の渋滞の解消にも結びつく。

③緊急時の県道65号の代替道

休山東側では、1本しかない既存道路の代わりの道としても利用できる。県道65号が台風や高潮、津波の被害で分断された場合でも、山側を走るもう1つのルートがあれば、阿賀南の町の孤立をさけることが可能となるのだ。

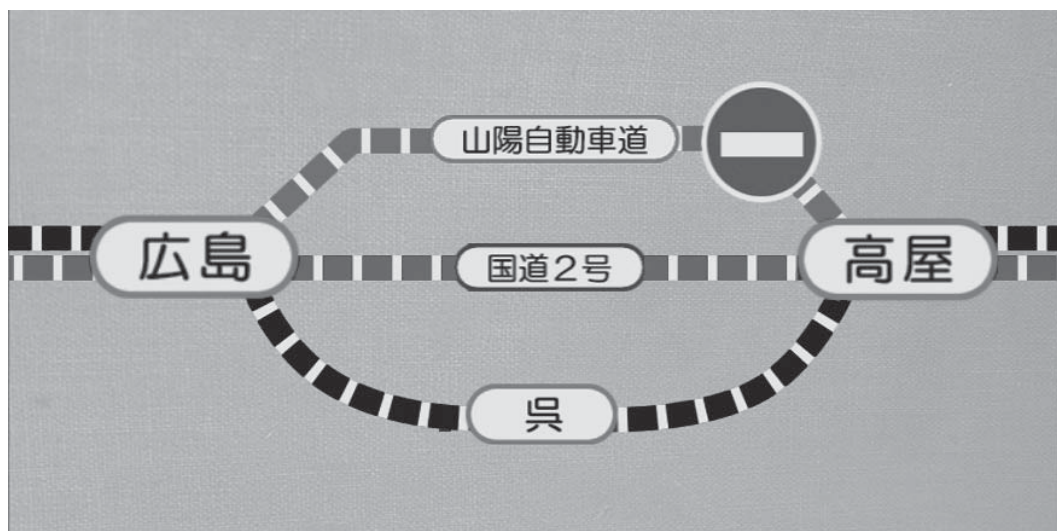
④ 山陽自動車道の迂回路

この他にも、山陽自動車道が通行止めとなった場合、高屋から呉をまわり広島へ入る自動車道を確保することで、国道2号の渋滞解消にもつながるというメリットもある。

⑤ 地元経済の活性化

3つ目の恩恵は、地元経済の活性化。

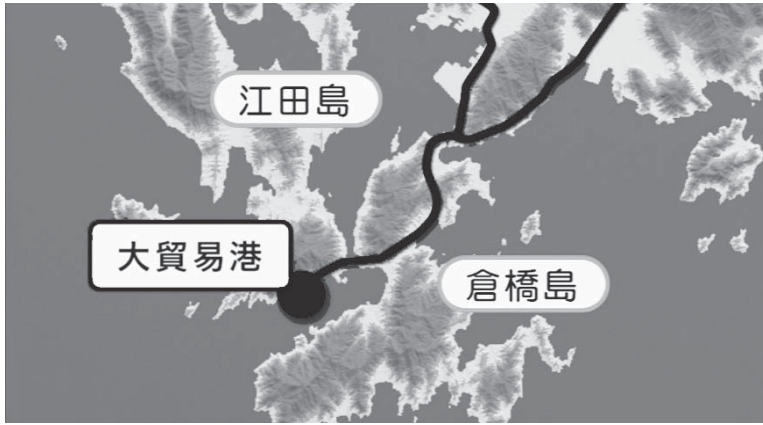
新しい自動車道は、「観光や産業の活性化」はもちろん、道路の建設過程においても、地域産業へ貢献する。高架部分の建設に使われる金属資材は、呉エリアの地元企業に、需要と雇用の拡大を促すはずである。



山陽自動車道不通時の国道2号の渋滞の解消

広島大貿易港

これだけ多くのメリットをもつ環状自動車道構想だが、さらにおおきな構想にもつながっている。



広島大貿易港への自動車道

大量かつ高速な海外との物流が求められる現在、日本では大型貿易港の必要性が叫ばれている。人件費を下げられない国内では、港の建設費を抑えることがコスト削減、競争力の強化に不可欠である。倉橋・江田島エリアは、防波堤がいらぬ島影、水深の深い海があり、自然の利を活かした天然の良港になる。また、都市部と比べて安い土地など、巨大な貿易港を低コストで建設できる。自動車道を音戸から江田島まで延長し、そこに大貿易港を建設すれば、江田島エリアの長所を生かし、多くの産業と雇用を

生み出すことが可能となる。さらに、自動車道を江田島の切串から似島を経て宇品につなげば、広島・呉・島嶼部をつなぐ巨大な環状道へと発展する。大貿易港と大環状自動車道。これが城戸常太の構想の完成形である。

夢の道

道が生み出す地域の発展。それこそが、これからの日本の発展につながるという父常美からの信念を受け継ぎ、城戸常太は明確な未来へと道を紡ぎつつけていく。それはかつて父常美が運命の人と呼んだ「池田勇人」と歩んだように、城戸常太は、「故池田行彦」の後継者「寺田稔」と共に、今日、苦渋の道にあるこの国とふるさとに、一筋の光明を見出すに違いない。それは、四半世紀にわたる城戸常太が目指す理想の未来へとつづく夢の道でもある。



大環状自動車道構想

● 主な参考文献（内容・引用および図版）

『21世紀に生きる君たちへ』（司馬遼太郎 朝日出版社）

架橋に夢を架けた 親子二代 五〇年

2013年4月18日 第一刷発行

発行所 …………… 自由民主党広島県呉市第二支部
〒737-1377 呉市倉橋町1381番地
TEL(0823)56-1215

企画・構成・編集 …… 井 上 武

構成協力 …………… 國井隆史 空本壮平

印刷・製本 …………… 有限会社 空本印刷所
〒737-0045 呉市本通5丁目11番23号
TEL(0823)24-2625

